

死者供養をめぐる諸問題

——東アジアの視点から——

代表者・司会 松尾 剛次

コメンテータ 岡田真美子

人はなぜ石塔墓をたてるのか

——阿弥陀信仰と弥勒信仰——

松尾 剛次

二〇〇六年に秋川雅史の歌声で「千の風になって」という歌が大流行した。その歌詞の意味は、よくよく考えてみると、盆・暮に墓参りをする習俗に対する批判となっていることに気づかされる。たとえば、「私のお墓の前で 泣かないでください そこに私はいません 眠ってなんかないません 千の風に 千の風になって あの大きな空を 吹きわたっています」というフレーズなどだ。

我々日本人の多くは、死体を火葬にし、火葬骨を墓石の下に埋める。後は年忌法要や盆・暮れに墓に詣でて故人を偲ぶ。なぜなら、骨が依り代となって、故人の霊魂が墓に在ると無意識に考えているからだろう。こうした観念があるからこそ、墓参りや戦没者の遺骨収集が行われてきたのである。

ところが、「私のお墓の前で 泣かないでください そこに私はいません 眠ってなんかないません」というのだから、実に、従来の霊魂観への挑戦ともいえる大胆な歌詞といえる。そ

うした歌が大ブレイクし、批判がさほど起こらないことは、日本人の霊魂観が変化しつつあることを端的に示しているのかもしれない。

ところで、「死体を火葬にし、火葬骨を墓石の下に埋める」という習俗、言い換えれば石塔を墓所に建てる習俗はいつから一般化したのだろうか。答えは鎌倉時代後期以降である。すなわち、鎌倉仏教の成立、とくに、律宗僧や念仏僧の活動が大きな影響を与えたと考えている。

中世の律宗と聞いても知らない方がほとんどであろう。奈良時代の南都六宗の一つの律宗と思われるかもしれないが、実はそうではない。現在の宗派でいえば、奈良西大寺を本山とする真言律宗や唐招提寺を本山とする律宗などの源になった教団で、叡尊（一一〇一—一二九〇）・忍性（一二一七—一二三三）・覚盛らが代表者である。彼らは、釈迦が定めたという、僧侶集団の規則である戒律を重視し、その護持を人々に勧めた。当時の史料では「律僧」とか「律家」と呼ばれた。先述の南都六宗の律宗との決定的な相違点は、彼らの身分が官僧（官僚僧、国家公務員の僧侶）ではなく、私僧（遁世僧と呼ばれた）であった点だ。こうした律僧や念仏僧たちが、中世石造墓の中心的な造立主体であったのだ。

日本古代においては、石造墓を作るのはまれであり、天皇の墓ですら九世紀には所在がはっきりしなくなっていた。石塔墓が天皇・貴族から武士クラスまで一般化するのには、律僧や念仏僧らの鎌倉仏教僧が活躍する中世になってからであった。

とくに、中世には二m—三・四mもの巨大な五輪塔や板碑な

どの石塔墓で、かつ硬い安山岩、花崗岩を加工したものが造立された。現存するものだけでも、一三世紀末—一四世紀初頭のものが一〇〇を超える。しかも、その下には金銅製の骨蔵器が見いだされる。そうした、巨大石塔造立の背景にある、死後、まず極楽に往生し、五六億七千万年後の弥勒下生に際して墓にもどるといふ阿弥陀信仰と弥勒信仰の混交した仏教思想に注目した。

すなわち、五六億七千万年後という途方もない時間においても靈魂の依り代である骨を納めた墓を保たせるために、硬い石製の墓が生み出されたのである。

幽霊の誕生

——江戸時代における死者供養の変容——

佐藤 弘夫

太古の昔から、人は身近な死者が末期の苦しみから開放され、安らかな状況に至ることを願いつづけてきた。死者は人間界とは異なる超越者の世界＝他界の住人であるがゆえに、その安穩な境地への到達は、他界での安定した地位の獲得と不可分の関係を有していた。しかし、日本列島に限ってみても、他界のカミ観念、及び現世と他界の関係は、時代によって大きな変容をみせていた。そのため、死者の安寧を願うという一点において生者の思いは変わらなくても、その「安寧」の中身と供養の目的は、各時代のカミ観念・他界観に強く規定されることにな

った。

古代においては、死者の靈は死後速やかに遺体を離れると考えられた。靈が肉体に再び帰ることが不可能となった時点が、死の確定だった。したがって、古代の死者供養の中心課題は遺体そのものの処置ではなく、遺骸を離れてさまよう靈魂をいかに無害なものへと浄化していくかという問題だった。その有効な手段と考えられた「清浄」や「滅罪」が、古代の死者供養のキーワードとなった。

理想の浄土の観念が肥大化し、死後にそこに往生することが大方の人々の目標となる中世では、死靈を確実に彼岸世界へ送り届けることが死者供養の究極の目的と考えられた。人々を救うためにあえてこの世に留まることを選択した聖人を別にすれば、なんらかの理由でこの世に残る死者は、決して望ましい存在とはみなされなかった。

中世後期から、他界浄土の観念は一転して縮小に向かう。やがて、彼岸世界に対して現世の比重が著しく高まる近世社会が到来するのである。近世は、他方では永続する「イエ」が確立し定着していく時代だった。もはや遠い他界に旅立たなくなつた死者は、「イエ」の墓地にある骨と墓標を依代として、永久にこの世に留まるものと観念された。そのため、近世では死者供養の課題は、墓地に棲む靈魂の安らかな眠りの実現にあると考えられるようになるのである。

死者が一つの空間を生者と分かち合う点において、近世の世界観は古代のそれに通ずる性格をもっているようにみえる。しかし、安定したイエと永続する墓地を欠くがゆえに、比較的短